

日本通信教育学会

提言

コロナ禍後の大学通信教育

筆者が、本稿を執筆している2020年5月13日現在、新型コロナウイルス感染症に伴う「緊急事態宣言」が全国各地に発令され、一部の県にて解除される報道がなされている。筆者は、神奈川県にある工科系大学の教務担当者として、オンライン授業推進する立場にある。その立場で、他大学を含めたあらゆる情報を見聞する中で、「コロナ禍後の大学通信教育」に注視すべきだと考えるようになった。本提言では、その注視すべき理由について、大学における「通学課程」と「通信教育課程」の側面から述べ、「コロナ禍後の大学通信教育が果たすべき役割」について述べたい。

「コロナ禍後の通学課程」

まずは、通学課程については、以下の2つが生じると推測している。

- ① 経済難による退学者が急増。
- ② オンライン授業から対面授業に切り替わり、対面授業による学習に適応できない学生が一定数生じて、退学者が増加。

上述①については、学費減免などの制度が各大学で導入される動きはあるものの、限定的かつ、一時的な対応となることは明らかであり、翌年以降の対応は流動的である。また、国による修学支援新制度の適用も想定されるが、これも全額の給付に至らないことが想定されるため、劇的な退学者の抑制に結びつくとは言い難い。加えて、新型コロナウイルス感染症の第二波、第三波による影響も予想され、これらを踏まえ、退学者は急増すると推測している。

そして、②については、オンライン授業を受講したことにより、オンライン授業の魅力に気付くと共に、対面授業に切り替わったことへの適応が出来ない学生が出現し、退学につながることも推測できる。

オンライン授業に関する実態については、京都ノートルダム女子大学の教務委員会による調査結果が参考になる。京都ノートルダム女子大学では、オンライン授業開始2週間後にオンラインによる調査を行い、全体で53.1%の回答を得ている。具体的な質問項目として「オンライン授業で困っていること」と「オンライン授業で良かったと思うこと」に関する複数回答選択による調査を行っている。ここでは、1年生の回答を、以下の表にて抽出し紹介したい。

Q. 「オンライン授業で困っていること」

- 第1位 (62.0%) コンピュータの操作に慣れていない
 - 第2位 (54.3%) 勉強のペースがつかみにくい
 - 第3位 (38.8%) 先生に質問がしにくい
- ※上位3位までの回答を抽出

Q. 「オンライン授業で良かったと思うこと」

- 第1位 (71.7%) 自分のペースで学習出来る
 - 第2位 (69.6%) 自宅で学習出来る
 - 第3位 (42.0%) 復習が何度も出来る
- ※上位3位までの回答を抽出

この結果を踏まえて「困っていること」の上位については、いずれも時間経過とともに改善できる課題である一方で、「良かったと思うこと」については、第2位の「自宅で学習出来る」は、新型コロナウイルス感染症への不安からの回答と推察できるが、第1位と第3位については、本来の「大学通信教育」が有する利点と言える項目である。その上で、緊急事態宣言解除後に対面授業へと切り替わった際に、「自分のペースで学習できる」環境を担保できる授業を展開しないと適応できない学生が一定数生じると推察している。無論、一大学の調査結果のみで断定することが難しいが、多くの大学において似たような実情を抱えているのではないかと推察する。

「コロナ禍後の通信教育課程」

そして、この逆転現象として、コロナ禍後の通信教育課程では③と④により、学生数が増加に転じると推測している。

- | |
|-----------------------------|
| ③ 経済難により通学課程を退学した学生が編入学。 |
| ④ オンライン授業を望む学生が編入学や新規入学が増加。 |

上述③について、授業料などの側面から推察しており、④については、意図せずに、学生がオンライン授業を経験したことにより対面授業ではなくオンライン授業を望む学生の編入学が増加すると推察している。

この理由の土台となる事実として、二つのことを示したい。まずはじめに、筆者は、本学会の幹事でもある八洲学園大学の山鹿貴史准教授と共に、昨年12月に文部科学教育通信にて、「日本における大学通信教育を考える 近未来の大学通信教育～不安と希望～」と題した寄稿を行っている。

この寄稿では、これまでの約70年に亘る日本における大学通信教育を概観し、近未来への不安と希望を記している。具体的に、「不安」として政府による「修学支援新制度」により、経済的不安が解消され、通信制大学および夜間（二部）大学への影響が生じることに言及し、「希望」については、近年、生徒数が増加傾向にある通信制高校について、通信制大学も併設する学校法人が多くあり、これから通信制による高大の接続が加速する仮説については言及した。

さらに、筆者は、今年1月に教育学術新聞にて「大学通信教育の今日的役割 これまでとこれからの大学通信教育」と題した寄稿を行い、これまでの大学通信教育の3つの役割として「高等教育の機会均等を担う役割」、「免許・資格取得支援機関としての役割」、「専門学校との併修制度による役割」を紹介し上で、「これからの大学通信教育」について、「通信制高校卒業生の進学先としての役割」を紹介し、現に平成25年度と平成30年度による大学通信教育課程の学生数における年齢構成比について「18歳から22歳」が人数および割合が増加していることに言及した。

「コロナ禍後の大学通信教育が果たすべき役割」

総じて、コロナ禍以前から、筆者は、今後の「大学通信教育」に明るい見通しがあることについて言及してきた。これは、繰り返しとなるが通信制高校から通信制大学に進学を

前提に言及したものであるが、今般のコロナ禍により、通学制高校および大学における通学課程で学ぶ生徒・学生は、その多くは意図せずオンライン授業を経験した。この授業形態が長期間に亘り生徒・学生に展開され、潜在的かつ好意的に授業を評価しているとしたら、進学先として「通信制大学」が挙げれば、「大学通信教育」は、さらなる明るい見通しとなるであろう。

最後に、改めて、前出の筆者による「教育学術新聞」にて論じた総括を再掲し、提言としたい。

総じて、それぞれの役割が展開され、時には、重なり合いながら「大学通信教育の今日的役割」が認知されてきた。その上で、これからの大学通信教育は、教育権を保障すべき教育機関に勤務する教職員が、大学通信教育の在り方を含めた魅力を情報として発信する過程で、今日的役割を確認しながら、その価値を認知してもらう普及活動が必要である。更には、入学者を退学させることなく、卒業に導くための支援体制構築や障害者を含めた多様性を意識したダイバーシティに基づく授業設計や教材開発が大きな課題であり、これが「大学通信教育の社会的責任」であるのかもしれない。そして、「大学通信教育の社会的責任」を果たすことが、これからの大学通信教育の未来を創造する手段になるのではないだろうか。

寺尾 謙（神奈川工科大学）

引用参考文献>

- 1) 京都ノートルダム女子大学教務委員会, 「オンライン授業に関するアンケート（学生）結果概要報告」https://www.notredame.ac.jp/pdf/cms/2020online_houkoku.pdf (2020年5月16日最終閲覧)
- 2) 寺尾謙・山鹿貴史, 2019, 「日本における大学通信教育を考える 近未来の大学通信教育～不安と希望～」『文部科学教育通信』ジヤース教育新社, No.474, pp.32-34.
- 3) 寺尾謙, 2020, 「大学通信教育の今日的役割 これまでとこれからの大学通信教育」『教育学術新聞』日本私立大学協会, 第 2795 号, p.4.